筆 記 試 験 国 語

受	験	番	号
	氏	名	

注 意

間 題 冊 子 が 配 5 れ 7 ŧ 開 V て は Į, け ま せ λ

間 題 冊 子 は 1 ~ 1 ジ か 5 15 ~] ジ ま で あ ŋ ま す 0

は じ れ め て < だ 号 さ Ņ 氏 と 言 わ れ た 5 ま ず 間 題 ₩ 子 0) 表 紙 ح 解 答 用 紙

枚

に

兀

そ

れ

ぞ

受

験

番

と

名

を

書

き

な

さ

い

答 え は す べ て 解 答 用 紙 に 書 き な さ 1

五.

問

題

 \blacksquare

子

に

書

き

٦

4

を

L

て

t

カコ

ま

11

ま

せ

 λ

六 t 表 B を め 上 てく に だ て さ V 机 _ \mathcal{O} と 上 言 に わ お れ き た な 6 さ す ぐ゛ に 筆 記 用 具 を お き 解 答 用 紙 Ł 問 題 #

子

七 試 験 時 間 は 匹 五. 分 間 で す

次の ① { Ó の 線部のカタカナを漢字に直しなさい。 また個~個 の 線部 0 漢字の読みをひらがなで答えな

- 1 お祭りでワナげをする
- 3 遊びにムチュウになる
- (5) 発言をヒテイする
- 9 7 紅白 キンゾク製のバットを用 0 ハタをふ
- (13) 1 教室の スが テイシャする 使用をキョ カする
- (15) 会社にシュウショク する
- (19) 田 畑 を耕作する

17)

古い館をおとずれる

- 2 弟 は にオサ ナ
- 4 となりの 国とドウメイを結ぶ
- 6 試合の 海 が マンチョ ウをむかえる
- 10 学問をオサ 8 る

()

る

8

展

開

15

コウフンする

- 12 手当をシキ ユ ウす
- (14) 日 本 セ イフの方針 出
- 16 期 限を設 け る
- (18) 川に 沿っ て歩く 種が

20

V

まわり

Ó

発芽する

二、次の|一|、|二|は同じ筆者による文章です。これらを読んで、 後の問いに答えなさい。ただし、 字数制限のある問い is

答える場合は、「、」や「。」などの記号も一字と数えます。

でも、 に呼ばれて、諭された話 井白石という学者がおりました。 学問の 神 様 4 たいだけで いです。 られるわ 少年のころは、子どもですから、 it がありません。 あるとき、 きっとさぼったのでしょう。 遊びたい時もあったでしょう。 それでお父さん いくら大学者

今はそんな物はなくなりましたけれども、 昔 は普通どの家庭にも米び つという、 お米を入れる、一斗ぐらい入るよ

が減 トルぐらいにあたります――大きな木の箱がありました。 うな― 「わからないけれども、これを、一年ぐらいとっていると、やっぱり米はへったなあ、とわかるだろう。 けていると、 ひと粒とる。 ったかよく見るようにと言われる。 今は一斗なんて言ってもわからないでしょうが、 】急にば とってもとっても、どこをとったのか全然わからない。米は減りません。そのとき、 ある日、ふと何か自分がだめになったな、と気づくものだ」と諭されたのです。 かになるわけでもないし、急にどうなるわけでもないから、だいじょうぶだ。しかし、 しかし、 わからない、減ったことさえわかりません。 それを持ってこさせて、その中から米をひと粒とる。どこ 昔はそれが普通 の単位だったのです。 また、 今の単位で十ハリッ ひと粒とる。 お父さんが、 勉強も、

あります。 ぼくなんかとてもだめ、 うんだろうか」と言いだしました。周りの子どもたちで、「十日だろう」と言った子がありました。「十日ぐら の教えてい た生徒達 0 十日ぐらいはじきさぼるもん。十日じゃあ早すぎる」「じゃあ一月」しばらくもめたことが 中に、この話が大好きな子がいました。そして、「先生、何日ぐらいさぼると、 あ

減ったことは事実なので、 言えるけれど、 げた人は、 で、私は、「十日の人も二十日の人も一年の人もいるでしょうけれど、 A私にはそれが、 一日休むとそれだけどうしても落ちると、本当に「異口 ひと粒でも減ったことは減ったとも言えるんでね」と言って、 とても大切な教えでした。 減らないのとは違うのです。 それこそ「心のパン」でした。ひと粒とる。 そういうことを考えていたいな、 同音のように言われます。 しかし、いろんない 何も結論は出 と思いました。 わかりません。 しませ U () 仕 と粒だから 事、い んでした。 しか 技 を仕 けれど とも 上

-

他 0 とは ・好きです。 ち よっと違 花 0 嫌言 た意味で な 人とい う 花が は 好きなのです あ んまりい でし しょうけ れども、 特に好きです。

時に ね と言っ そんなことを考えなが ら花が咲いて、その陰で、《 落ちちゃうような、 っていうのは もん」と、 ますから、 あるとき、リーガーベゴニアという花を買いました。 私は愛しくてしかたがない。自分が、若くないせいかもしれないけどね」と言いました。「だけど、 私の大好きな花屋さんから買いました。 たのです。「この、 みんなきれい以外のことを考えなかったのですが、私が、「よーく見てごらん。これね、 側 「大好き」 ね、 15 あ 花の中から花が咲くんです、少し経つと。そうしてね、その花が大きくなっていくでしょう。 っ うす た花 と言いました。 ら ĺ は、 次 好きが () の花が、 いつのまにか、セミの a セミの ₩, っ てながめているわけです。 そして「どこが好きだか当ててごらん」と言うと、「だってこんなにきれ 粉々になって、 もとの花を、 羽とか、 トンボの みんなが「きれいな花ね」と言って、「先生、この きれ 羽みたいに透きとおってくるの。 土になってしまう、そこのところが好き」花が好きとい 羽みたいな感じになるのよ」それで、「私は、そこが そして、 いに隠している。 教室 へ持っていきました。 老いぼれて死 ちょっと触っても んでいく姿を隠 真っ赤なとてもきれ 花好きなの」 リーガーベゴニア この花 して ポ 口 っても 好 ポ と言 るの きだ」 0 中か ・です その

たのです。 から、 セントポ . 自じ 慢でした。 ーリアとか、 () ろんな花を教室用に用意してい ました。 私は花を育てるの が、 わり と上手だっ

15 いつも思っ . 聞 どんどんの ントポ いてくれたのです。「どんなこと?」と。 そんなこと書かなくても どういう秘訣でこれをきれいにしているか聞 けい子という子が てい ij まし びてきてしま アという た 、「先生、 花 は ② わ が 後載し () ・ます。 教 () え子 あの、 んだけど、 0 は、 それで私 難 セン L なかな () トポーリアの育て方っていうのを、 花 育て方って、 は、 です か秘 きれ いてくれない か 訣 ら、 を 聞 15 ち やっぱりあるものよ」と言いましたら、 咲 1) ょ てくれ か っ . の せ と手 が、 る ませ 0 落 ほんとうに残念だと思うくら が ち ん。 自 が 「慢で、 あると、 「きれ 書いたらどう」と言ってく 誰 () かにその秘訣 よく咲 ね き きませ 和 1. ね を聞 ん。 と言う 葉 `Ⅱ あ|| 7 L っ た。 だ ば れたので ほ け ば

とう

か

私 加 0 手元 减 15 は、 鉢は が ・をやれ 五 鉢 ほどあ ばい いってもんでもない。 りました。 「あ のね、 どうってことありませ だいたい、 やり 一過ぎが 小駄だめが、 3 4 なんでも、 ば 1) 過ぎ、 セ 7 ポ う IJ P は

目

と、

私

は

待

つ

てまし

たとば

かりに、

話

L

始めました。

うか」というような質問を、よく花屋さんなんかにしている人がいます。 いたらおやりなさい」などと言い それ から、 その水をやるのを、 「一週 ・ます。 間に一ぺんやるんですか、 十日に すると、 . ~° んやるんですか、 花屋さんは花屋さんで適当に、「乾れ どっ ちが () て

やったりやらなかったりしていると、 でしょうけれど、一鉢しか、今日、 きかどうか、ということを考えてやってい になっているかどうか、 目です。 やったら駄 「乾いたらおやりなさい」これは真理で、 つ まり、 問目に 決まってい 鉢によって、土の量が わかりません。 、ます。 今、 水をやるのが ④ 私 1 絶対 番 だから、 やり過ぎにならないことでは は は、 かなけれ Ľ 同じってわけにいきません。また、量 なにか教室に 8 の紫の花にやっ 適当でな ついでにやるというのではなく、 ば 駄 目なのです。 いるような、 時 もあるのです。そういうことを《 たからと言って、 ちょうどこついっ あります。 楽しさが は 湧 1+ 0 同じぐらいで 鉢ずつ、今日 () れども、 いてきました。 しょにやってい でに隣にもやろう。 五 つの は、 あっても、 b 鉢 1= いときもある 見極めて、 これ 度 同 15 ľ は 水 を 駄

だったから、もう十日もたってるけど、やる必要はないな」と思ったり、Bそういうことを考えていると、 うことを言われ 日もありますから。どんな天候の中で、ということが、一 らら 何日に一度なんてきめても駄目です。 ても、 それは違うのです。 私は、 なぜなら、 そんなことに心をつかうの 様でありませんから、 晴れ た日もあるし、 が 雨 0 楽しくて、 週間に一ぺんずつや 日もあるし、 「そうだ、 日 なんだ 今週 和 ŧ ば あ はこう

のように、 勉 強 しているときの楽しみが、 「あれ 心にパンを食べたような、 はこうだったな、 これはこうだったな」と、 湧いてくるのです。 楽しい気がしてきます それで私は、 教室でしてきたことや、 勉強してい いつも花をいじってい るような気がするのです。そして、 教室 0 るものですから 仕事などが、 頭 今さら みなさ

んから、花が好きだと思われていました。

ことは、 ほ んとうにきれ 私だけではなくて、 これ いに は迷信 よく咲いたこと」とか、 だ、 そう言っている人は沢山い と思う人がい るそうですが、 声を出して、 、ます。 花にむかっ 呼 び か け る。 7 「上手に咲いた。 そうすると花がきれ きれ () 15 ね、 咲 \langle です。 花 とか

るんですもん」 そういう話をして、 と言うと、「そんなの迷信だよ」 私が、そばにいた子どもたちに、「ほめてやっ と言うのです。 て頂 がだい。 この花 ね こんなにき n () 15 咲 () 7

ら、み っぱがどんな風に、どこから栄養を得ているかってこと、 かけると、 「迷信ではありません。 んな大変びっくりして「そんなこと、ほんとうにあることかな」「だって本当でしょ。 気が、 С だってね、人間 かかるから、 の息に何が入っていると思う? 科学的に言ったって、そのほうが 調べてごらんなさい。そういう風に書いてあるもの」と言 花の養分は炭 1 0 よ 酸 と言ったのです。 ガスでしょ。 調べてごらんなさい。 そうした 呼 び

浅かっ ば、 あるのです。 お医者さんの 感じる人と、 「だっ そう それはほんとうなんだと書いてありました。 科学的 7 が、 私 たりす は お 大 花にも感覚は 医 のろい人といる。感覚の鈍い人。鈍いからない、なんて言ったら失礼です。 .者さんがこう書いているじゃない 書 に言えるということが、 私 るということではない は、 ばりしまし 、た物に またこれを自慢話にして、 !あって、その感覚の動き方が恐ろしくのろいだけなのだと言うのです。 は、花とか た。 植物は、 でしょうか。 私 の自慢だったのですけれども、 おそるべき長い時間 子どもたちに聞 花は、全然感覚がないもの、感情がないもの、 そういう人を感覚がないと言ったら、 お医者さんは科学者でしょ。 か がかかるけれども、 せましたけれども、 あるお医者さんが書い だからそうかも」と言ったりしまし やはり感覚はあるんだと書 みんなⅢ半信半疑でした。 ただ感じるのが 大変失礼 と誰も たが、 人でも、 でしょう。 筆り を読 が 遅さ かっ すぐ 4 7 ましたら たり、 その

た。

たのです。 なことを考えながら、⑤人を育てることと、 私 は今、 そのことをあんまり信じていませんけれど、そういうこともある、ということ。まあ、 花を育てることが、 妙に結びついて、 私の大切な勉強 そういう、 の一角を作って 、ろん

かもしれません。そして、⑥ヒヤシンスのようなもの もしろいのです。 みずみに、 花を見ながら、 花 がが 咲 人間 かないということなどが、私は妙に、 0 人間でないものが、どんなふうに育つものなのか、というようなことを考えるのが、 みなさんもそんなことを考えながら、 育つ秘密がずい分あるような気がするのです。 おもしろくてなりません。 が、 そうしたものをご覧になったら、また、 寒さを経な こいで、 ずっと暖 そういう花の生活の、 かにしておくと葉 ちょっ 植 物 とおも たまらなくお ば 0 生活 ば しろ ij 0 伸の す

〔大村はま『心のパン屋さん』筑摩書房〕

問 記号で答えなさい。 線 部 Ι 「異 口 同 音 I I 「あん ば · III 半信 半疑」 の意味として最 れも適 切切 なも のを次 からそれぞれ 選

Ι 異口 同 音 工 ウ 1 P 様 様 一つの 一つの意見を 々な人が同じ意見を言うこと 々な人が色々な意見を言うこと 意見を様々な口調で言うこと 权 ば 1) 強く言うこと \coprod あ んば P 工 1 状態

具合 折 様 i子 合い ()

工 ウ 1 T 信じることができるところも疑わしいところもあるということ 信じることで疑 信じられるところが少ないと疑 信じられるところが () 0 あ 気持ちを少なくさせ 和 ば疑 わしさは少なくなるということ の気持ちも生じてくるということ る 0 が 大切 であるということ

 \coprod

半

信

半

疑

問 二、本文中の だし、同じ記号を二度用いてはいけません。 ^ **>** a~cに入る言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、 記号で答えなさい。 た

ア じーっと イ ファーッと ウ ゆったりと エ ひっそり

問 い三、本文中の【 】に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、 記号で答えなさい。

アー日がんばったところでよくなるもんでもない。

イ 一日の努力をばかにするもんではない。

ウ 一日ていどの成果を気にするもんではない。

工 一日ぐらいさぼったってどうなるもんでもない。

ガーベゴニア」

問 .い四、 線部①「他の人が考えるのとは、ちょっと違った意味で、 花が好きなのです」とありますが、

問 問い五、 -線部② 線部③「やっぱり、 「機嫌の難しい花」とありますが、どういう花だということですか。簡潔に答えなさい。 セントポーリアは水の加減が難しい」とありますが、どういう点で難しいのですか。

の花をどうして好きなのですか。解答らんに合うように、三十字以内で答えなさい。

本文中の言葉を用いて二点答えなさい。

問い えなさい。 日ごろどのようなことに楽しさを感じていると読み取れますか。 ---線部 ④「私は、なにか教室にいるような、 楽しさが湧いてきました」とありますが、 次の中から最も適切なものを選び、 ここから、 記号で答 筆者が

ア 教室にいる子どもたち一人ひとりに応じて対話をすること

イ 教室にいる子どもたち全員で一つの目標に向かうこと

エ 教室にいる子どもたち一人ひとりに自分の考えを伝えることウ 教室にいる子どもたち全員に同じように接すること

筆者

は

問 て、 どうなり 花 線部 か ますか。 咲 線 (5) かない」の「寒さを経ないで、 部 「人を育てることと、 6 解答ら ト ヤシン んに合うように答えなさい。 ス 0 ようなも 花を育てることが ずっと暖かにしておく」という部分を人が育つ場合に のが、 寒さを経 妙 な 1c 結 び 0 ず て と暖 とありますが、 かに して お < この · と 葉 考え方に 当 ば 7 ば は か 8 1) もとづ ると 伸び

問 な気が 内で答えなさい。 を考えて するのです。」とありますが、 線 部 いると A「私にはそれ なんだか それこそ とても大切な教えでした。 筆者にとって「心のパン」とはどのようなものですか。 心にパンを食 べたような それ こそ 楽し 0 い気がしてきます パンコ でした。」、 十字以 В 勉 強 「そう L 上十五字 うこと

号も一字と数えます。なお、本文中に一部省略したところがあります。 次の文章を読んで、 後の問いに答えなさい。 ただし、 字数制 限 のある問 1) に答える場合は、 や

ませ 助け b にしたのが、農業です。毎年変わらずにめぐみがもたらされるように、①様々な工夫をこら や材木や魚や水を 0 田 人間は生きていく以上、食べものやくらしの材料を天地自然から受けとらなくてはなりません。人間 して、 光と水をしっ んがすごい んぼのまわりを小さな畦(土手)で囲んで水を溜めるようにしたの 天地自然のめぐみをいただくしか生きる道はないのです。この天地自 発明でした。それから稲は、 かり受け 「つくる」ことはできないからです。これらを「つくる」 とめることができるようになっ 同じ場所で、毎年同じように たから っです。 は、 育つことができるようになりました。 誰^だれ 0 は 然からのめぐみのい 天地、 始 8 たの 自然ですから、 か、 して仕事をしてきました。 もう調べることはでき ただき方を豊か 15 間 は はそ 米や 和 天か を手 大 豆

少なかっ

た所に遠

<

か

ら水路を掘って、水を引いてこなければなりませくためにはそれまでの湿原や草原や森林を切り開

んでし

た。

それ

までの自

然環境とはちが

かなけれ

ばなりませんでした。それまで水

が

田んぼを開

環 境 が 何 より . 生 一まれ ました。 天 地 自 然 これを「自 の感謝 0 然破は 気持ちは 壊」だと考える人は 捧き げ られ てきました。 誰も () それ ませんでした。 は狩り 猟採集時代よりもりょうさいよう 生きていくため 強くなり 13 懸ん 命でした。 しか

ます。 くれ る 謝 0 相 かい す 手に かも る あ 気 昔は まし . 感 持 謝 ち) は ② の気 内 から 持ちを届け 「受け 0 身_ まなざしだけで、 0 たくなります。 態 度 か Ġ L 生きている世界を見ていたので、 か その 生まれ 相手が ませ 天地 ん。 自 だとすると、 分だけ 0 力ではできないと自 感謝の気持ちは多くの百姓と 思い は こ と 0 ほか 覚した時 強く濃 共 有 助 でき 激し け 7

3 2 7 7 天 地 名 代 とし て神 さま が 生ま 机 生きとし 生 け る ŧ 0 15 魂 を 宿ら せ 間 自 Ġ 受け 身で お ず

とは いくの 別 いです。 0 自 生きもの 生 きることが a 0 殺生 西洋 当然 的 ゃ な「自然破壊」 0 「生きもののたたり」 ようになり や「自然保護」などという考え方はまっ ました。 を感じる感性は農業によって強まっ そして、 農業によっ て殺され る生きも たくあり てい 0 ませんでしたが、 の情愛が深くなっ たのです。 それ

分にもなり かに /ます。 .農業ほど生きものを殺す しか 百姓 15 はそのことを悩んだ形 仕 事 は あ りませ ん。 跡 「農業は が 昔からほとんどあ 自 然 破 壊 だだ りません。 という主 張 それはどうしてでしょうか。 には 反 論できない ような気

ここに 「農業は 自 然破壊かどうか」 に対する日 1本的 な答えが隠されています。

中

代では 同じ世 が 「農業 優勢だからです。 界を別 は 農業は自 自 然 破 Q 壊だ」 0 然を支えてい 見方で見ているに このことを生きも と () う 見 る 方と とい 過ぎな 0 農 う 業 へのまなざしを例にとって比 内 いからです。どちらの言い は からのまなざしの方は弱 自 然 を支えて 1 る Y 1 分にも耳を傾ける べてみましょう。 う 々しくなっ 見 方は、 矛盾 てい ま して 必要が ず。 る あります。 わ b 1 では 科 あ 学的な見方 L か せ

様 は 生 性 物 福 多 約 岡 様 県では 性 が 提 起され、 という言葉が ○一七年でも 九 九三年に日本も一八 広まってきたの 38 % 1: 過ぎませ は、一 ん。 番 目 九九二年のリオデジャネイ 外 0 来の言葉で、 参加国になりました。 普段は使うことがないからです。 しかしこの言葉の 口 ての 地 球 環境サミットで、 内容 を 知 つ 7 生 る 物 多

きも いう言 のは 机 は 「生 ひと は 一物多様 そ 頭 0 n 0 と目を合わせて、 1) 0 方は ぞ V な 性」 とっ 和 か 間ま て 0 整理 は 違が 生 0 きもの っ わかりやすそうで案外そうではありません。あなたが田 生きも ては するときに いないのですが、 た 話したりするでしょう。 0 ち の集合だとして、 Ó 姿ば 現 机 る* かりです。 概念です。 何か冷たい、 できるだけイ だからこそ、 しかし「生物多様性」 * 臨 場感の 実感が伴わない感じなのです。 メージが 「自然保 な B .湧くようにしようとしますが、 護とは生物多様 と目を合わせたりすることは 外 んぼの中に入ったとします。い から 0 まなざし 性 0 保 0 護でも 典 型です。 あ ゃ る はり思い あ 0 V) です れを ませ ろ () · 浮か あ ろな Ţ ん。 なた 生

とでしょう」 ことなの たし でしょうか。 is と言 ろんな生きもの わ 和 これ ると、 に答えることは、 そうだなと思い がいるっ ていうことは、 、ます。 案外難 しか しいことです。 それだけの生きものが生きられ L そもそもそんなにい ろいろな生きも る豊 か な生態系 0 が ることは かい あ る てこ

中略

ます。 護は を超こ 1) ませ Z 考えら Ž 宙 n ん。 7 船 地 は 地 球 ともすると、 地 そこで科学的なデー 全体 球 球 規き ない、 模は 0 問 で という言い 題 考えな 地 が 私 たち 優先されるようになります。 球 it 環境」という言葉が一 和 タに基づ 人一 方は説得 ば、 人の 地 球温 実感を カが いた話になります。そうなると専門家の言い 暖 あります。 化 軽な 九 んじ、 九〇 0 問 年 頃る しか 題 みなさんが住んでいる在所 や 海 し、こういうスケー から世界的 を 渡れ る 鳥 に使 た ち 0 わ 保 机 ルの 護 るように や 地地 分に従わざるをえなくなります。 大きい見方は 海 洋 域) を移 なり 0 特 まし 動 .性が す 私たち る鯨 た。 眼中になくなり や 魚 な 地 どの 域 や 保 玉

か 価 つなが 値 観を土台にしてい ず 'n 15 ない しても、 からです。 これ る b Ó で、 西 洋 世界各地 発 (1) 新 L のそれぞれ い自 然保 · の 国 護思想があ に特有の生きも まり広がっ 0 観、 ていない 天地 のは、 自 然 観、 近 代化 生 命 かべ 進 生 6 だ 玉 観 0 事 情 \mathcal{E}

うとしていますが、 からです。 る人の姿が見えないことです。 こうした反省を踏まえて、 にさらに 具体 的な事例であっ 大切なことは、 期待してい 現在では人間と自然の関係を考える学問 ても、そこで生きている人間 あまりにも一般的に考えられ、 「生物多様性」に いも のでしょうか。 しても「地 球 の感覚 環境」に 誰にでも、どこにでも通用するような語り方をされる 穴内 ・思想が「環境倫理」として一つの からのまなざし)が表に出てこないからです。 しても 「自然 保 護」に しても、 そこで生 分野をなそ ーきて

を近代化することがいいことだと思っているとそう受け取るのです。 と話すときに、 生きもの 私たちが 死んでいっても、 「草とりは大変ですね」という意味に受け取り、労苦ばかりを読み取ってきたのは間違い 死を乗り越える最良の方法ではないでしょうか。百姓 また生まれて、 生が くり返すことを見れば、 が「また今年も どんなに*
安堵することでしょう。 草 が 伸 び る季節 が や です。

ます。 安定しているということですね」「生物種の持続のことですかね」などと、外からのまなざしだけで片付けようとし たずに済んでいるのです。 は 生 そこに「また草と会える。草とりができる」喜びと安堵を感じるからこそ、「草を殺す」 物 0 再 生 のことですね」「死 西洋の「自然保護」はここまで踏み込むことがありません。このことを科学者に話すと、 んで、 分解されて、また生まれる物質循環のことですね」「そういう生 という 態系は

などに見ら 匹賞 匹 れる外からのまなざしの特徴です。 0 生 死 より ŧ 生 態 系 全体 を安定させ こうしたいかにもⅡ 持 、続させ てい .けば何の 大局 0 に立ったかのような視点は、 不 都 合も ない、 う 生

7 生きも ることを忘れ 0 生 死 か 7 b 目 まい をそらすことになります。 ます。 生きとし生け るもの 0 死 の上にこそ、 自 然もそして農業も V) 立

「また会える」とい う 実感こそ、 自 然 が 変わら ない ことの 実感で ŧ あ る 0 です。 Z 和 は 農 業 が ず っ Y 続 H b てきた

証

になり は かい , 受け 天 地 業 /ます。 自 ることが 取 は 然に れないことになります。 同 Ľ 天罰があたることを恐れるからこそ、 * 仕 できるようになり 事 和 をく 的 なくらしの知恵を身につけてきたのです。 返 L 続 け この ました。 てきまし 変化こそが最 た。 この百姓 そ 0 天地自 も避さ 結 仕事を続けないと、 果、 けなけ は然の 同 ľ 8 れば 生きもの じぐみへ なり の感謝 ませ が 天地 毎年毎年生まれ \bar{k}_{\circ} 自然が変化し の念も強くなり それ は 天 地 るようになり、 田田 自 然 ·ました。こうし 畑 の怒り も荒れ に触 て、 0 て百 ŧ ること ぐみ 顔

姓に るか ŧ ませ 的 11 · う とし 0 だ 批 L は から だと、 判 С 蛙 が あ とし 田 んぼで i) 0 こういう見方に対 ´ます。 情 ŧ 机 愛 までも 0 責任 が 蛙 (蛙) 発はっ Z が () が 語 n を育てる 問 できるとい っ つ は 西洋的 ば て来ま えないということでは 1, して「結果的にそうなっ 生まれている こした。 わ な、 う け 近代的な見方だと思います。 が わ あ 1+ 現 b 代 ~ ませ す。 0 0 は、 誤 ん。 ありません。 技 蛙 解 術」 が てい とは のまなざしが無意識 ない か る 目 ように 0 中 技 的 て 術を仕 とする 略 あ 言 つ て、 事 付 ŧ d 1+ 0 0 に含まれ 意識 中に 加 (米) 蛙を える 組 的 み込 を意 育 15 Z 守 7 てる意 ううう Z 4 識 1, 自 る 和 的 2 分 識 は 15 百 L 結 0 生 姓 的 果 ŧ 産 な た 仕 的 0 す 事 稲 0 る 15 かい 作 へ ŧ 破 行 技 は 壊 7 0 祈 な わ で、 n lt る n 7 あ た 目 Y

ず 15 知 とに í かく受けとめ 無 田 意 植えを 識 5 生 一きも る 田 0 まわり が \bigcirc 百 ŧ 姓 守っ をし、 0 伝 7 稻粒 統 () 別かり 的 る な感覚なのです。 \bigcirc て をし続けると、 す。 なぜなら、 この受け 身 天 体 0 地 中 \bigcirc 身 に生きもの 8 0 (" みを受 感覚がこれまでうまく表現され 1 0 身 ま で なざし 選せん 択な す るこ 蓄な 積き れ、 は て来な 知 b

然を支えてきたことを強調したいのです。 かったことが残念です。西洋の発想とは異なる発想で天地自然とつきあい、 めぐみをいただきながら、 身の 回 りの自

(宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』ちくまプリマー新書)

*名代 ――代理を務めること。

*概念 ---個々の特ちょうは考えず大まかに物事をとらえた内容。

*臨場感 ―現実にその場にいるような感じ。

*安堵 ――物事がうまくいって安心すること。

·親和 ——親しんで仲よくなること。

問 記 号で答えなさい。 ₌線 部 I 「ことのほか」・Ⅱ 「大局に立った」 の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、

ウ 1 P 物 事の 事 . О 0 なりゆきを大事な所だけ見とお なりゆきを広く全体的に見 様子を反対 . О 立 場 から大まか わ に見た た した した

 \prod

大局

15

立った

工

物

0

内側までこまかく調べるように見た

問 本文中の a ~dに入る言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、 記号で答えなさい。 た

だし、同じ記号を二度用いてはいけません。

もちろん 1 ところが たしかに 工 したがって オ なぜなら

問い三、 -線 部 ① 「 様 々な工夫をこらして仕事をしてきました」とありますが、どのような工夫ですか。 本文中の

語句を用いて説明しなさい。

問 四、 線部②「『受け身』 の態度」とありますが、「受け身」の態度とはどういう態度のことですか。 それを説

明し た次の文の 0)に当てはまる言葉を、 本文中から二十字程度でぬき出して答えなさい。

◎ 〕と感じる態度。

人間

は

問 () 五、 身でおのずから、つまり自然に生きることが当然のようになりました」とありますが、このような生き方を具 線部③ 「こうして天地 の名代として神様が生まれ 生きとし生けるも 0 に魂 を宿 らせ 人間 自ら

体的に説明した次の①~④のそれぞれについて、 正しいものには〇を、 あやまっているものには×を書きなさ

΄,

① 生きものを殺すとその生きものからたたられると感じる。

(2) あらゆる生きものに愛情をもって応対しようとする。

(3) 自然にはいっさい手を加えないことが大事であると考える。

(4)自 中でほかの生きものとともに人も生かされていると考える。

次の問いに答えなさい。

問

線

部④

「百

姓にはそのことを悩んだ形

跡

が昔からほとんどありません」とありますが、

これ

15

ついて、

(1)「そのことを悩んだ」とは具体的にどのような気持ちを持つことか、 説明しなさい。

(2)筆者 は 「百姓」が①で答えたような気持ちを持たないのはなぜだと考えていますか。 五十字程 度で説 明しなさ

問い せ、| 線部A「内からのまなざし」、B「外からのまなざし」とありますが、次に挙げたそれぞれの言葉は A

Bどちらの「まなざし」に関わるものですか。 A·Bに分けて記号で答えなさい。

ア科学的な見方

イ 「受け身」の態

度

ウ

スケールの大きい見方

エー人一人の実感

オ 天地への感謝の気持ち

力 生物多様性

----線部「『農業は自然破壊だ』という見方と『農業はキ 誰にでも、どこにでも通用するような語り方

問い 然破壊だ」という見方も「自然を支えている」という見方もできる事がらを一つ取り上げて、あなたがどちら の見方をするかについて、 けではありませ *l* 同じ世界を別々の見方で見ているに過ぎないからです。」とあります。農業のように、「自 理由を挙げて書きなさい。 自然を支えてい 3 という見方は、 矛盾しているわ